呪われた宿命

――『ハムレット』におけるモラルとアクション――

尾崎寄春

シェイクスピアの作品の中で、否、世界の文学の中で、これほど有名な、そしてまた問題の多い作品は少ないと思われるが、王子ハムレットが苦難の末、やっと簒奪者の手からデンマークの王位を奪い返したかと思うと、それがそのまま仇敵ノルウェイ王の一子フォーティンブラスに襲われるという結末にも、やはり問題が残るようである。[1] たしかに、彼の名前は、開幕劈頭から語られ、我々に紹介されてはいるが、本人が登場するのはわずかに二度、それも大詰めになってからのことなので、これまでのハムレットの苦悩を見て来た我々にとって、たまたまカタストロフィの場に来合わせたこの人物が、

For me, with sorrow I embrace my fortune;[2]
I have some rights of memory in this kingdom,
Which now to claim my vantage doth invite me. (V. ii. 309–401)

と云って、あっさり王位を襲うことに、何とも割り切れないものが残るとしても、あるいは当然かも知れない。もっとも、フォーティンブラスの劇的機能については、「行動のアナロジィ」という観点からファーガスン (Francis Fergusson, *The Idea of a Theater*, Princeton University Press, 1949, pp. 139–40) が、また最近ではメイ

ナド・マック (Maynard Mack, 'The Jacobean Shakespeare', *Jacobean Theatre*: Stratford-Upon-Avon Studies 1, Edward Arnold (Publishers) Ltd., 1960, p. 28) が「ミラ・シーン」(or 'mirror situations') の観点から、それぞれ説くところであるが、しかし、視点をハムレットその人の行動におくならば、この結末は、ハムレットにとって、一見、余りにも不当であるように思われるであろう。これは、どう解すべきなのであろうか？ ゴダードは云う——

「ポウランドを征服したフォーティンブラスは意気揚々と凱旋する。しかもハムレットは、わずかに、彼を自分の後継者に指命するだけの息を残しているに過ぎない。何という皮肉か！ 先王ハムレットが征服したすべてのものは、まさにヘンリ五世のそれのように、何にもならなかった。否、それ以下である。彼のかつての敵、フォーティンブラスが、王国を継承しようというのだから。これが、亡霊の復讐慾のもたらした結末なのだ。[3]」

正式の勝負の結果ではあったが、ノルウェイ王フォーティンブラスを倒し、領土を奪った先王ハムレットが、自分の弟クローディアスに王位と王妃と、そして生命を奪われ、その復讐を促がした挙句の果が、王子ハムレットの死を招いたばかりか、仇ノルウェイ王の一子フォーティンブラスに王位を襲われることになる。皮肉な運命のいたずらと云うべきか、恐るべき因果の応報と云うべきか。たしかに、これは、この悲劇の示す一つのモラルであり、劇の構成を支えるパタンであるとも云えるであろう。しかし、今のように云うゴダードの口振りが気になる。それはレヴィンの次の言葉と考え合わせると明らかになるであろう。レヴィンは、ゴダードが「復讐慾にかられた」亡霊の観点から云ったことを、ハムレット＝フォーティンブラスの観点から、次のように云う——

「先王がそのために戦ったすべてのものは失われた。彼の王朝は絶滅した。彼の国土は彼の敵の子孫によっ

て治められるであろう。模範的な人物であるフォーティンブラスは、復讐をあきらめたが故に、デンマークの王国を継ぐことになった。[4]」

『ハムレット』の序幕は、深夜、城の高台で見張りをする番兵たちの会話で始まる。何故このようにきびしく見張りをするのか？　何故昼夜をわかたず戦争の準備を急ぐのか？　このような問いに答えて、ホレイショウが、実はノルウェイ王の忘れ形見フォーティンブラスが父の仇を討ち、失った領土をとり戻そうと戦争の準備を進めているからだ、と説明する。しかしそのフォーティンブラスは、兄なき後、王位を継いだ叔父（ハムレットとの類似に注意。[5]）の意見に従って復讐をあきらめ、準備した戦力をポウランドへ向けるのである。とすれば、たしかに、彼は、聞き分けのよい、「模範的な」、いい子ということになる。神はそれをよみして彼に御褒美をお与えになったと考えても、それは自由であろう。しかし、だからと云って、ハムレットも、叔父クローディアスの意見に従って、亡父のことは忘れるべきであったろうか？　復讐はすべきでなかったのだろうか？　勿論、レヴィンは、復讐すべきでなかったとは、口に出しては云わない。復讐すべきか否かは、幸いなことに、ハムレットの解くべき問題であって我々の問題ではない、[6]と云って巧みに問題をそらしてしまう。それを、正面から取り上げて、ハムレットは（そしてこの問題に関しては誰であれ）復讐すべきでなかったと云い切るのが、先に挙げたゴダードである。

時代の如何を問わず、人間にはすべて意識下に種族的復讐（racial revenge）の本能がある。と同時に、それを抑えようとするよりすぐれた性向（the rarer tendencies）があるものだ。これを「理性」と云ってもよい。理性がなければ人間は獣（'a beast, that wants discourse of reason' — I. ii. 150）に過ぎず、これこそ人間を獣から区別し、天使に近づける性質（'That capability and god-like reason' — IV. iv. 38）なのだ。そこで悪魔は人間の本

能（或は「血」）に働きかけ、天使は人間の理性に訴える。かくして、ゴダードは、復讐をためらうハムレットに、「分裂した人間」（the Divided Man）の典型を見るのである。父の命に従おうとするハムレットと己れの良心に従おうとするハムレット。復讐に燃える「激情」（passion）とそれを抑えようとする「理性」（reason）、「血気」（blood）と「分別」（judgement）、悪魔と天使が、ハムレットの心の中でその魂を争っているのだ。従って、ゴダードにとっては、ハムレットの遷延は、「ハムレットを非難する根拠とならないばかりか、却ってハムレットの名誉となる。それは、彼の魂がいまだ死せず、内心の葛藤なしには父親の命令に従おうとしないことを示している」[7]からである。しかし、自ら仕組んだ「鼠おとし」の芝居に（激情にかられて）自らを誤まったハムレットは、原始的な本能の「血」のとりことなり（Cf. III. ii. 408 ff.: 'now could I drink hot blood, …'）、ポロウニアスを刺殺して、ますますその深みにはまり込んで行く。このようにみるゴダードにとって、遂に復讐をとげ、そして一命を落すハムレットは、従って、悪魔の誘惑に負けたハムレット、魂の気高さを失った「悪魔的なハムレット」（the diabolical Hamlet）なのである。しかし、果してそうだろうか？　また、ハムレットは復讐すべきでなかったのだろうか？

この問題はしばらくおくとして、ともかくも、ゴダードは、ハムレットの内心の葛藤に、人間の心に巣喰う二つの傾向の葛藤に、ハムレットの遷延の原因をみるのであるが、一方、これを外的な、社会的な道徳とのモラル・ディレンマにみようとする見解も古くからあった。いずれにしても、復讐を否定する点では共通である。J・Q・アダムズの意見はこれと真向から対立する――

「ハムレットの遷延を説明しようとして、次のように説く人がある。つまり、シェイクスピアは、正義をおのが手で行うことは道徳的な悪であることを示したかったのだ、だからハムレットに復讐を遷延させるのだ

と。しかし劇全体の含む意味(the implication of the whole drama)はそのような説を否定する。シェイクスピアは復讐を神聖な義務として強調する。そして我々に、ハムレットの遷延を不甲斐なく感じさせこそすれ、ハムレットは復讐すべきでなかったなどとは、どこにも、仄めかしてさえいない。子が父の仇を討つことが——特にハムレットのような場合——道徳的な悪であるなどという観念は、ハムレットの頃にはなかった。それどころか、復讐は、殺害された者が永遠のやすらぎを得るために、必要なことだと信じられていた。何故なら、死者の霊は、殺害者の罪があばかれ、相応に罰せられざる限り、永遠の責め苦にさいなまれる運命にあったからだ。[18]……我々はこの劇に近代的な倫理観をもち込まないよう注意すべきである。ハムレットの時代の人にとっても、またエリザベス朝の観客にとってさえ、ハムレットは神聖なる義務(dread duty)を遂行するよう要求されたのだ。劇全体を通じてハムレットはいろんな事を疑うけれども、父が彼に課した義務の正しさを疑うことは決してなかった。だから、このような仮設はテクストに一致しないものとして、捨て去って先に進むことにしよう。[19]」

このアダムズの意見は、ある点では正しく、又ある点では正しくない。ハムレットが復讐を「道徳的な悪」と見做したという証拠は、たしかに、アダムズの云う通り、テクストのどこにもない。また父が己れに課した使命の正当さに、ハムレットがいささかの疑いをもさしはさまなかったのも事実であろう。[20] しかし、だからと云って、復讐を悪とみる思想が近代的なものであり、エリザベス朝にはなかったとしたところにアダムズの誤りがある。事実、復讐を禁じ、復讐は神の怒りにまかせよとする思想は、一般にひろく行われ、復讐劇流行の端を開いたキッドの『スペインの悲劇』(*The Spanish Tragedie*)において、すでに、はっきりした形であらわれている。にも拘らず『ハムレット』にそのような思想が見られないこと、あるいは一歩ゆずって、そのような思想が含まれ

ているとしても、アダムズを先のような誤解に導くほどに目立たないものであるという点に、問題があるのではなかろうか[11]？

一

「悪をもって悪に報いることなく、万人の目に気高しとされることに心するがよい。……愛されたる者よ、決して復讐してはならぬ。それは神の怒りにまかすがよい。何故なら、『復讐は私のもの。私が報いる、と主がおっしゃっている』と書かれてあるから。……悪に負けてはならぬ。善でもって悪に打ち勝つがよい」（『ローマ人への手紙』一二章　一七、一九、二一節）

これこそ、リリ・B・キャンブルによれば、「ルネッサンスが、中世から受け継いだ悲劇物語の中に見出した威嚇（threat）であり、また約束（promise）であった。そして、これが、その解明と例証に、『君主の没落』（*The Fall of Princes*）に続く数々の偉大な悲劇物語集が専心これ努めた主題（テクスト）なのである[12]」。

十五世紀から十七、八世紀にかけて、英国では、悲劇物語集が続々と刊行されている。試みに、その代表的な書名を挙げるならば、*The Fall of Princes*（1430-8）に続いて、

A Mirror for Magistrates（1559, 1563, 1574 and 1578）

Reward for Wickedness（1574）

Mirrour of Mutability（1579）

Theatre of Gods Judgements（1579, 1612, 1631）

Thunderbolts of Gods Wrath（1618）

Triumph of Gods Revenge against the crying and execrable Sinne of Murder (Vol. 1, 1621; Vol. 2, 1622 ; Vol. 3, 1624)

Gods Revenge against the Abominable Sinne of Adultery (1669)

ということになるであろう。これらの実話集の基本的な教訓は、その題名から察せられるように、神の復讐が罪を追求し、君主の没落も運命の気まぐれと見えるものも、実は神の御業にほかならないとする思想である。たとえば、*Triumph of Gods Revenge against the crying and execrable Sinne of Murder* の 'crying' というのは、勿論「ひどい」という意味だが、また同時に、本来の「泣き叫ぶ」という意味をも保っていると思われる。というのは、当時、殺された人の血が神に訴えるという思想があったからで、キッドの『ジョン・ブラウンの殺害』(*The Murder of Iohn Brewen*) の結びの言葉は次の通りである——

…The Lord giue all men grace by their example to shunne the hatefull sinne of murder, for be it kept neuer so close, and done neuer so secret, yet at length the Lorde will bring it out; for bloud is an vnceassant crier in the eares of the Lord, and he will not leaue so vilde a thing vnpunished.[39]

また、*Thunderbolts of Gods Wrath* という題名からも、神の怒りが、人間の罪に対する復讐が、どのような形で行われるか、想像されるであろう。この書名が暗示するように、天雷となって罪人の頭上におちかかることもある。天変地異、災害といった形をとってあらわれることもある。あるいは又、戦争という形で行われることもある。この最後の思想は、シェイクスピアの作品で云えば、『ヘンリ五世』の四幕一場、アジンコートの戦の前夜にヘンリ五世が語る有名なせりふの中にみられる——

…Now, if these men have defeated law and outrun native punishment, though they can outstrip men, they have no wings to fly from God: war is his beadle, war is his vengeance. (IV. i. 168-71)

本国で罪を犯して人の眼をあざむき通したものも、神の目をあざむくことは出来ぬ。神はそうした悪者を戦争にひっぱり出し、そこで殺すなり片輪にするなりして罰をお加えになる、というのである。

このように、いろいろな形で神は人間の罪に復讐なさるのだから、人間としては、復讐は神におまかせするがよい。聖書にもある通り、復讐は神に属するもので、これを自分の手で行おうというのは、神をないがしろにする僭越な行為であり、神はこれをお罰しにならずにはおられない、[18] というのが当時の復讐に対する考え方なのである。であるから、『スペインの悲劇』の主人公ハイァロウニモウ（Hieronimo）は、ハムレットの第三独白にも比すべき大独白の中で、

Vindicta mihi.
I, heauen will be reuenged of euery ill;
Nor will they suffer murder vnrepaide.
Then stay, *Hieronimo*, attend their will:
For mortall men may not appoint their time. (III. xiii. 1-5)

と一度は復讐を思い切る。が、手にしていたセネカの一行（『アガメムノン』の第一一五行）に導かれて、全く逆の

結論に到達するのである——

Strike, and strike home, where wrong is offred thee;
For euils vnto ils conductors be,
And death's the worst of resolution....
And to conclude, I will reuenge his death... (*Ibid.*, ll.7-20)

ハイァロウニモウの結論は、結局、復讐しようということに落ち着くのであるが（そして血に飢えた狂人となって、復讐を遂げた後、悲惨な死に方をするのだが[15]）、ここに、すでに、復讐は神にまかすべきものとする思想がはっきり見られるのである。

『ハムレット』以後の他の作家の作品で云えば、たとえばチャップマンの『ビュッシ・ダンボワの復讐』(*The Revenge of Bussy D' Ambois*) の主人公クレルモンは

Shall we revenge a villanie with villanie. (III. ii. 99)

と

Wee must wreake our wrongs
So as wee take not more.[16] (*Ibid.*, ll. 106-7)

という二つの命題の間に迷い、また『無神論者の悲劇』(*The Atheist's Tragedy*) におけるシャルルモンは、復讐を止める父の亡霊に向かって

You torture me between the passion of
My blood and the religion of my soul. (III. ii.)

と訴える。しかし、きわめて「哲学的」と云われる『ハムレット』に、このような命題は出てこないのである。（もっとも、ジェイムズ王朝に入ってからの復讐劇において、このような問題が、特に王に対する復讐の問題[17]が、表立って取り上げられるのには、ジェイムズ一世の政治的見解ないし王権に対する見解（「王権神授説」）の反映をみることも可能であろう。[18]そして、そこでは、問題はきわめて実際的な、低いレヴェルにおいて扱われていることも注意されるであろう。ハムレットの苦悩を思うとき、思い半ばに過ぎるものがある。）

しかし、シェイクスピアの作品にも、王に対する復讐観がみられないわけではない。[19]たとえば、王に夫を謀殺されたと疑うグロウスタ公爵夫人と彼女をなだめるジョン・オヴ・ゴーントとの対話がそれである——

Gaunt. But since correction lieth in those hands
Which made the fault that we cannot correct,
Put we our quarrel to the will of heaven;
Who, when they see the hours ripe on earth,
Will rain hot vengeance on offenders' heads....
Duchess. That which in mean men we intitle patience
Is pale cold cowardice in noble breasts.[20]
What shall I say? to safeguard thine own life,
The best way is to venge my Gloucester's death.

Gaunt. God's the quarrel; for God's substitute,
His deputy anointed in His sight,
Hath caused his death: the which if wrongfully,
Let heaven revenge; for I may never lift
An angry arm against His minister. (*Richard II*, I. ii. 4-8, 33-41)

王は神の代行者(minister)であり、必要とあらば神が機を選んで天罰をお与えになるのだから、臣下の身分で王に復讐を加えてはならない。たとえ王が暴君であっても従うべきだ、と云うのは、これも神の復讐の一つのあらわれで、神は、その「笞」(scourge)として、わざと暴君を送って人民を苦しめ、そうすることによって世の腐敗をお罰しになる、と考えられていたからである。[21] ハムレットの場合、相手はその愛想のよさと政治的手腕のため、一見暴君とは見えないかも知れないが、王位簒奪者である以上、立派な暴君である。しかし、簒奪者であるとは云え、廷臣の同意を得て王位についたからには、ハムレットの復讐は、犯すべからざる王殺し(regicide)を意味する。しかも、クローディアスの犯した簒奪は、天人共に許すべからざる大罪なのだ。それでもハムレットは、復讐を天にまかせて、自らの手で正義を行ってはいけないのであろうか('since correction lieth in those hands/Which made the fault')? それでハムレットはためらうのだろうか?

ここで注意すべきは、当時の復讐観で禁じられていた復讐は、私情私恨に発する「私的な復讐」(private revenge)であって、これに対して「公的な復讐」(public revenge)はその限りではなかったと云うことである。これは神が人間を通して、人間をその手段(instrument)として、なされる復讐であって、先に挙げた暴君(神の「笞」)もその一つのあらわれであるが、裁判による成敗も「公的な復讐」の一であった。[22] だからこそ、復讐

（＝正義。これが後には単なる流血となる）を求めるハイァロウニモウは、先ず王に訴えようとする——

I will go plaine me to my Lord the King,
And cry aloud for iustice through the Court,... (*The Spanish Tragedie*, III. vii. 69-70)

そして彼自身、裁判官として、

For blood with blood shall, while I sit as iudge,
Be satisfied,[29] and the law dischargde.
And though my selfe cannot receiue the like,
Yet will I see that others have their right. (*Ibid*, III. vi. 35-8)

と、正義の代弁者としての信念の程を語るのである。神から裁きの権限をあずかった裁判官は、地上における神として、人を罰するのだ。（勿論、それは公平無私のものであり、そこに裁判官個人の感情がまじってはならないけれども。）[30]ともかくもハイァロウニモウは、王に訴えることができた。しかしハムレットは誰に訴えることができたであろうか？（'O all you host of heaven! O earth! what else?' — I. v. 92)

ところで、神の代行者は裁判官だけではなかった。先の『リチャド二世』からの引用でも明らかなように、全世界を支配する神の位置を、その支配を神から委ねられた人民の間にあって占める君主（prince）が、やはりそうであった。ミナンダ（Menander）も云うように、君主は、正義を行うべく定められた、万物を支配する神の生ける姿（the lively image of God）[31]だったのである。君主は国家の秩序をまもり、人民の安寧をはからねばなら

ず、もしそれを脅す者があれば、ただちにこれに復讐を加える義務と権利があった。[36]（勿論、この場合も、復讐の動機に私情がまじっていてはならない。）

とすれば、ハムレットの場合はどうであろうか？　彼はクローディアスを、単なる親の仇として、また彼に対する憎しみからのみ、殺すのであろうか？　そして、そうすることにより、他の復讐劇の主人公のように、神の権限を侵した廉で天罰をうけて死ぬのであろうか？　それとも、ハムレットは、一切の私情を捨てて、ただデンマーク全体のために、「関節のはずれた」世を正すために、王子（prince）の義務として、「正義の復讐」（just vengeance）をなすのであろうか？　もしそうだとすれば、それではハムレットの死は何を意味するのであろう？ベルフォレの原話では、ハムレットは、復讐の本懐を遂げた後、自らを

...lawfull successor in the kingdome, and just revenger of a crime above al others most grievous and punishable[37]

と主張することによって、叔父を殺した自己の行為を正当化し、著者のベルフォレ自身も、ダビデの故事を引いて、[38]ハムレットを弁護し、その復讐を讃えている。勿論ハムレットは死なない。彼は復讐の本懐を遂げた後、先にイングランドへ流された時めとった妻をひきとりに再びイングランドに渡り、そこでスコットランドへやられ、その国の女王と恋仲になり、イングランド王を殺し、妻を二人つれて帰国するといった後日譚がついている。それはともかく、このようなハムレットの自己弁護や、作者の道徳的解釈（モラライゼイション）は、ベルフォレが新たにつけ加えたもので、もとのサクソウの版ではその必要はなかったであろう。[39]つまり、原話通り、主人公を復讐後も生きながらえさせるためには、ハムレットの復讐を完全な公的復讐（パブリック・リヴェンジ）として弁護する必要があったのである。逆に云えば、それほどまでに当時の復讐に対する倫理観が強かったと見ることができるであろう。

このことは、しかしながら、裏を返せば、復讐劇の主人公は、完全な公的復讐者（パブリック・リヴェンジャ）として正当化さえされるならば、死なずに済むこともできるということを意味する。しかし、シェイクスピアのハムレットは死ぬ。とすれば、シェイクスピアは、ハムレットの復讐を公的復讐（パブリック・リヴェンジ）とは認めなかったのであろうか？　ハムレットは、復讐の本能にまけて、叔父を殺したに過ぎないのであろうか？　それとも、シェイクスピアは、ハムレットの復讐を公的復讐（パブリック・リヴェンジ）とは認めても、復讐そのものを認めなかったのであろうか？　ハムレットは、王子（プリンス）として、どうしても「関節のはずれた」時世を正さねばならぬ。しかし、それは、あくまで（シェイクスピアにとっても）「呪われた宿命」（一幕五場一八九行）だったのであろうか？　シェイクスピアは黙して語らぬ。彼のハムレットもまた、明確に語ることを許されてはいない。ベルフォレのハムレットは、簒奪者を倒した後、デンマークの人民を前にして堂々たる大演説をぶち、復讐の正当さと正統の王子としての権利を説くけれども、そのような機会を与えられぬシェイクスピアのハムレットは、ただ、ホレイショウに、

Thou livest; report me and my cause aright
To the unsatisfied.　(V. ii. 350-51)

と頼むのみである。が、ハムレットの云う‘my cause’が何であったか、ホレイショウは我々に語ってはくれない。またハムレット自身、その長い、苦悩に満ちた摸索を通して、キッドやターナ、あるいはチャップマンの主人公のように、明確な対立命題として、復讐すべきか否かに迷っている様子もない。殆どすべての他の復讐劇において、この問題が、何らかの形において明確にあらわれているだけに、きわめて「哲学的」と云われる『ハムレット』におけるこの命題の欠如は、如何にも奇異に思われる。それは恰かもそのような命題は（命題としては）ハムレットの（そしてシェイクスピアの）第一の関心事ではないかの如くである。　それは恰かも直面した復讐を契

機として、ハムレットは（そしてシェイクスピアは）、復讐の問題に対する考察を通して人生の問題を、人間存在の根本に立ちかえって、自分の目で見直すことに心を奪われてしまっているかの如くである。ハムレットが、復讐すべきか否かの命題の間に、もし迷ったとするならば、それを暗示していると思われる唯一の箇所が、

To be, or not to be:…　　(III. i. 56 ff.)

に始まる独白であることは、意味深いことと思われる。ハムレットにとって、命題は 'To be, or not to be, revenged:…' ではないのである。あくまで 'To be, or not to be' なのだ。

Whether 'tis nobler…

以下を 'To be, or not to be' のパラフレイズとみて、'To be' の 'be' を 'Let be' (V. ii. 236) の 'be' と同じく、'To be [as one is *or* stands at present]' と取るにしても（とすれば、「現状のままでいること」とは「苛酷な運命に耐えること」であり、「現状のままでいないこと」とは現状を打開すること――つまりは復讐すること、などとハムレットは云っていない。'Or to take arms against a sea of troubles,…' と云っているだけである――ということになる）、またL・C・ナイツが示唆するように、

「存在の意味は、問題中の問題であり、これは、たとえボエチウスに従って、運命の打撃は耐え忍ばねばならぬと信ずるにしても、また積極的に悪と戦うがよいと考えるにしても、やはりそうなのだ」[6]

と取るにしても、'To be, or not to be' という表現は、復讐の問題に対する（そしてそれを通して人間のあり方を問題にする）ハムレットの（そしてシェイクスピアの）姿勢を示して遺憾がない。しかもそれに続けて

Whether 'tis nobler in the mind…

と云うあたり、その表現はハムレットの面目躍如たるものがある。右にすべきか左にすべきか、どちらが善か悪

かと云っているのではない。どちらが「心の気高い」行いかと云っているのである。これこそハムレットの（そしてシェイクスピアの）関心事ではなかったか？　時の道徳に、宗教上の教義に、合うか合わぬかが問題なのではない。ハムレットにとって（そしてシェイクスピアにとって）、要は魂の問題（'is't not perfect conscience,…'—V. ii. 67）だったのだ。キッドやターナ、あるいはチャップマンらの作品にみられる教義上の命題が『ハムレット』にみられないとしても不思議はない。オーンスタインも云うように、

「我々は、シェイクスピアのドラマが、彼と同時代の群小作家の研究から引き出されたパタンに一致すると期待することはできない。彼らは時事的な、そして末梢的な問題に夢中になっていたが故に、そして舞台を文学外の目的に——政治家あるいは自然主義者を論駁するために——用いたが故に、我々の学問的な訊問を甘受する。シェイクスピアは、同時代の問題のもつ永遠の意義を常に摑んでいたが故に、また人生を見る詩人の洞察力の広汎さが彼の芸術と人間のおかれている状況との関連性を決して失わしめなかった故に、学問的解釈の暴虐を逃れるのである。[31]…

…道徳的理想の真実と美が、人間経験の岩床の如き現実として、シェイクスピアの中に立ち現われるとき、哲学的価値を再建しようとするチャップマンの努力が如何に真剣な、そして不必要なものにみえることか。[32]」

それでは、シェイクスピアは、この「同時代の問題」——ハムレットの、「復讐」という大問題——の中に、どのような「永遠の意義」を見出したであろうか？　また、彼のおかれた思想的風土にあって、それをどのように処理したであろうか？　シェイクスピアが明確にその意図を語らぬ限り、我々は、ただ、ハムレットの復讐に対して彼が与えた劇的表現——アクションとその表現——を通して窺い知る（ことができると信ずる）のみである。

二

さて、我々が最初に見るハムレットは、はなやかな宮廷の中にあって、ただ一人、黒い喪服に身をつつみ、憂愁に鎖された、孤独の王子である。そして、その原因が、父の死に対する悲しみと母親の行状に対する幻滅（'His father's death and our o'erhasty marriage'—II. ii. 57）にあることは、彼のクローディアスやガートルードとのにがにがしい対話を通して、また、それに続く第一独白を通して、ただちに明らかにされる。しかし、ハムレットのメランコリの原因は、それだけではあるまい。彼は、まだ、父の死が、クローディアス（'a mildewed ear,/Blasting his wholesome brother'—III. iv. 64-5）によるものであるとは知らない。しかし母を堕落させたクローディアスの悪の力が、彼を王に選んだ（ポロウニアスをはじめとする）腐敗した廷臣たちの上にも働いていることは（そしてそれが後にはハムレットのかつての友人ロウゼンクランツとギルデンスターンに、恋人オフィーリアに、又その兄レアーティーズにまで及ぶのであるが）、その鋭い直覚力でもって悟っていたに違いない。父王なき後のデンマークは、まさに、

> ...an unweeded garden,
> That grows to seed; things rank and gross in nature
> Possess it merely. (I.ii.135-7)

なのである。誰かが（正しくは、神から王国という「庭」を預かった者——プリンス——が）雑草を引き抜いて、手入れをしなければならぬ。しかしどのようにして？ 真相を知らぬハムレットは、ただ当惑し、許されぬ死を求め、一変した世の姿を歎き、

It is not nor it cannot come to good.... (*Ibid.*, l. 158)

という予感を表白するのみである。何かある。しかし一体何があるのか？ きっと何か起る。起らねばならぬ。しかし何が、どのようにして？ ハムレットは、胸が裂けようとも、ただじっと黙って耐えるほかない（一幕二場一五九行）（のであろうか？）。

と、そこへ、ホレイショウらが、亡霊のことを知らせにやってくる。

My father's spirit in arms! all is not well;
I doubt some foul play: would the night were come!
Till then sit still, my soul: foul deeds will rise,
Though all the earth o'erwhelm them, to men's eyes. (I. ii. 255-8)

かくして亡霊は、ハムレットに、事態の解決の糸口と行動のきっかけを与えるのである。

亡霊は、その夜、ハムレットに、

Revenge his foul and most unnatural murder. (I. v. 25)

と命じた後、事の真相を語る。

Seems, madam! nay it is; I know not 'seems'. (I. ii. 76)

と叫んだハムレットではあったが、亡霊から真相をきくまでは——

How weary, stale, flat, and unprofitable,
Seem to me all the uses of this world! (I. ii. 133-4) [My italics]

——外的世界に対する彼の意識は、'seem' の段階に止まっていた。今やハムレットは、「見かけ」のヴェイル

を切り裂いて、存在の本質への探究を始めるきっかけを得るのである。この世の一切の習わしが、厭わしい、陳腐、平板、無益なものに「見える」だけなのか、それとも実際そうなのか？　実際そうなのなら、その現実をどうすればよいのか？　どこに真実の価値を見出せばよいのか？　生きる望みをも失わせる「雑草の蔓った」庭に、しかも生きるには、どうすればよいのか？　どのような生き方が、心の正しい者のとるべき道であろうか？世の災厄の根源を絶って世を正すことにあるのだろうか？　（とすれば、どのようにして？）それとも『哲学の慰さめ』によって忍耐の生活を送ることにあるのだろうか？（しかも、この天と地との間には、「哲学」の思いも及ばぬことがある！）。

かくしてハムレットは、半人半獣のサタ（satyr）が支配する腐敗したデンマークにあって、「守るよりも守らぬ方が名誉となる」（一幕四場一六行）習慣の行われている社会にあって、既成の道徳・習慣や伝統的な価値に絶えず批判の目を向けつつ、[34]己れの生き方との関連において、復讐の問題を考えるのである。ポウランド遠征に向かうフォーティンブラスの軍隊を目のあたりに見て、

Rightly to be great
Is not to stir without great argument,
But greatly to find quarrel in a straw
When honour's at the stake.　(IV. iv. 53-6)

という彼自身の行動の原理を引き出すけれども、決してフォーティンブラスの行動を是認しているわけではない（'This is the imposthume of much wealth and peace,…', *ibid.*, l. 27）。[35]「本当に優れた」（'Rightly to be great'）行為か否かは、行動を起すことそれ自体にあるのではなく、その起し方（'greatly', *i.e.*, magnanimously, justly, as be-

'fits a man whose reason and blood are allies, not opponents)[29] にある。ハムレットにとって、それは、時の「名誉観」に合うか合わぬかの問題ではないのである。むしろハムレットは、フォーティンブラスによって体現されているとみられる伝統的な名誉観を批判する。彼にとっては、問題はあくまで'Whether 'tis nobler in the mind...'なのだ。

しかし、ポロウニアス誤殺に已れの宿命をみたハムレットは、遂に、イギリスへの航海の途中で起った事件から、人間の理解を越えた神の摂理を悟るに至る——

Our indiscretion sometimes serves us well,
When our deep plots do pall: and that should teach us
There's a divinity that shapes our ends,
Rough-hew them how we will, —— (V. ii. 8-11)

しかし、それも、後でそれと悟ったに過ぎない。たしかに、海上でハムレットの覚えた胸騒ぎ('in my heart there was a kind of fighting,'—V. ii. 4)は、神の恩寵のあらわれであったのだろうが、しかし予感をすべて神の導きであるとするのは、信仰を迷信に堕さしむる以外の何物でもない。だからハムレットは前兆を信じない('we defy augury,'—V. ii. 230)のである。いずれ我々は神の御手の中にある。だから、じたばたしたってはじまらない、と云うのではない。勿論、覚悟は肝要('the readiness is all'—V. ii. 234)。仕上げは神がして下さる('There's a divinity that shapes our ends')。しかし、だからといって手をこまぬいていていい筈がない。荒けずりは、及ばずながら('how we will')、人間がしておかねばならないのだ。オーンスタインも云うように、過去の出来事をかえりみて、それが神の摂理であると悟ったとしても、それがそのまま、将来の行動に対する導きを、忠告を、方

向づけを与えてくれる訳ではない。[37] ハムレットは、神の御手を信じつつも、自らの良心に従って行動する他ないのである——

…is't not perfect conscience,
To quit him with this arm? and is't not to be damn'd,
To let this canker of our nature come
In further evil? (V. ii. 67–70)

彼がおかれた状況にあって、如何に生きるのが心正しい道かと摸索してきたハムレットが、遂に達した結論は、それが如何に呪われた宿命であるとしても、自分は「関節のはずれた」世を正しに生まれたのだということ、王国の雑草をこれ以上はびこらせてはならないということ、それが神慮にかなうかどうかは別として、仕上げは神にまかせて、とにかく悪の根は絶たねばならぬということであった。それはクローディアスを「この腕で片附ける」ことである。ハムレットは、復讐しなければならなかったのだ。[38]

★

しかしそれは、ゴダードの云うように、血なまぐさい先祖の気風にそまり、復讐の本能にまけたためであってはならない。復讐を命じた亡霊が、その時ハムレットに戒めたように——

But, howsoever thou pursuest this act,
Taint not thy mind,… (I. v. 84–5)

——復讐にあたって「心をけがしてはならない」のである。弟に殺された無念さもさることながら(これは、しか

しながら、どうすることもできない)、亡霊の命ずるところは、

Let not the royal bed of Denmark be
A couch for luxury and damned incest. (*Ibid*, ll. 82-3)

にある。単に父の恨みを晴らせと云っているのではない。デンマークの王国を、このような腐敗の状態に放置しておくなと云うのである。簒奪と近親相姦の大罪を許すなと云っているのである。これを正せば、亡霊の恨みも、自然晴れることであろう。ハムレットも、父の命令が決して私事でないことは承知している。それは、

The time is out of joint: O cursed spite,
That ever I was born to set it right! (*Ibid*, ll. 189-90)

という彼の言葉からも明らかであろう。真相が明らかになった以上、「雑草の蔓るにまかせた」デンマークの荒れ庭を手入れするのは王子としての義務であり、神の認めるところである。ただしこの場合、ハムレットはあくまで神の代行者(ミニスタ)であり、個人的な感情をまじえてはいけないのだ。しかし亡霊の命令に応じるハムレットは、明らかに、父に対する愛情、憐れみ、恐れといった感情のとりこになっている。父に対するハムレットの極端なまでの憧憬と叔父に対する嫌悪の情は、それぞれをハイピァリアンと半人半獣のサタに譬えたハムレットの言葉(一幕二場一四〇行)にも既に明らかであった。後者に対するハムレットの嫌悪の情は、ここで憎悪に変るのであるが、一方、亡霊も、ハムレットを復讐にかりたてようとする時、先ず彼の子としての自然の情に訴えていることに注意されるであろう——

If thou didst ever thy dear father love—— (I. v. 23)

'love'という言葉を最後にもって来て強調し、ここで言葉を切ってハムレットの反応を見澄ますや、

Revenge his foul and most unnatural murder. (*Ibid.*, l. 25)

と切り出すのである。

If thou hast nature in thee bear it not;… (*Ibid.*, l. 81)

ハムレットが、父に対する愛情、憐れみ、恐れといった感情をもってこれに答えたとしても、それは人間として極めて自然なことであり、何ら咎められるべき筋合のものではない。問題なのは、これまた異常なまでの叔父に対するハムレットの憎悪である。

O villain, villain, smiling, damned villain! (*Ibid.*, l. 106)

と、亡霊の去った後、ハムレットは叫ぶ。これは、まだ、クローディアスの偽善に対する怒りの言葉ととってもよい。しかし、自己の不甲斐なさをせめるハムレットの

…or ere this
I should have fatted all the region kites
With this slave's offal: *bloody, bawdy villain!*
Remorseless, treacherous, lecherous, kindless villain!
O, vengeance! (II. ii. 606-10) [My italics]

という言葉は、まさに憎しみの爆発である。もしこのような精神状態で、ハムレットがクローディアスを殺したとするならば、また祈りの最中にある王を見逃すときに云うような悪魔的な気持のままで復讐(※)したとするならば、如何に彼が王子であり、悪を罰するためとは云え、完全な意味での公的復讐(パブリック・リヴェンジ)とは云えないであろう。そし

てハムレットの死は、その場合、ゴダードの云うように、まさに呪われたものだということにもなるであろう。しかしハムレットは、復讐を遂げるまでに大きな‘sea-change’[27]を受ける。そして遂にクローディアスを倒したときの彼の言葉は、

… Thou incestuous, murderous, damned Dane,… (V. ii. 336)

である。先の感情的な言葉に対して、このハムレットの言葉は、‘incestuous’にしろ‘murderous’にしろ、クローディアスの行った一々の客観的な事実を指し、恰かも判事が罪人の罪状を読み上げるかの如く、それに続く‘damned’はそれらの罪に対する刑の宣告の如き観がある。それはともかく、‘bloody’や‘bawdy’あるいは‘Remorseless, treacherous, lecherous, kindless’といった感情的な言葉でなく、一々の事実を指し示す客観的な言葉を語っていること、また‘slave’,‘villain’,‘knave’といった罵りの言葉でなしに、‘Dane’という言葉を使っている点などに、「私」を離れたハムレットの心の姿勢がみられるように思われる。かくしてハムレットは、単に王子であるという外的な資格だけでなく、私的な感情を脱して[28]真の「公的復讐者(パブリック・レヴェンジャ)」としての資格を得るのである。逆に云えば、クローディアスは最初から殺される資格のある悪人であったが、ハムレットは、最後になるまでは、クローディアスを殺す十分な資格がなかったと云うことも可能であろう。[29]

★

とすれば、ハムレットは、如何にしてその資格を得たのであろうか？ 何を契機として、彼は、神の代行者(ミニスタ)としての自覚に達したのであろうか？ 私は、それを、ハムレットが犯した唯一の、そして致命的な罪、つまり誤ってポロウニアスを殺したという事実にみたいと思う。[30] これが人生の皮肉というのだろうか、ハムレットは己れ

の死を予定することによって、その資格を得るのである。

これまでハムレットが復讐の行動にかりたてられるのは、何かを契機として、激情(パッション)にかられた時であった。何らかの激情(パッション)にかられてでなければ、彼は復讐の実行を考えることができなかったと云ってもよい。そして、今、祈りの最中にあるクローディアスを見逃がすことによって、悪魔的な（この時の彼にとって最も完全と思われる）復讐を期するハムレットは、この時、最も激しい、そして悪魔的な激情(パッション)にかられていたとも云えるであろう。これが、ハムレットに、我々が舞台上で見る唯一の遷延を行わせ、いざ実行という段になってポロウニアス誤殺という過ちを犯させるのである。

Our wills and fates do so contrary run
That our devices still are overthrown ;
Our thoughts are ours, their ends none of our own : (III. ii. 221-3)

という劇中劇の王の言葉の重みを、このときハムレットは、いやというほど思い知らされたに違いない。しかしハムレットの認識は、ここに止まるのではない。後に彼は、

Rashly,
And praised be rashness for it,... (V. ii. 6-7)

とホレイショウに語るけれども、今、激情(パッション)にかられてなしたポロウニアス殺害は、

O, what a rash and bloody deed is this ! (III. iv. 27)

とガートルードが責める通りである。しかし、ここにおいても、神の摂理は働いていたのだ。ハムレットは、この‘rashness’を通して、自己の犯した——あるいは神が彼に犯させた——罪を通して、神の摂理と己れの宿命

を悟るに至るのである——

For this same lord,
I do repent: but heaven pleased it so,
To punish me with this and this with me,
That I must be their scourge and minister. (*Ibid.*, ll. 172-5)

後の、海上におけるハムレットの‘rashness’が、神の代行者としての彼を救う神の配慮とするならば、今、激情にかられて犯した罪にハムレットが見た神の意志（‘heaven hath pleased it so’）は、この罪に対する罰として（‘to punish me with this’）、神の笞になることであったと云えるであろう。いずれにせよ、所詮、自分は神の‘passive instrument’にすぎない。これが遁がれられぬ宿命だ（‘must’という字の使い方に注意）というハムレットのこの時の気持は、彼のこの過ちが引き起した一連の事件や偶然によってますます強められ、例の

... There's a special providence in the fall of a sparrow....
... the readiness is all:... (V. ii. 230 ff.)

という有名な表現となって結晶するのである。

ところで、ハムレットは、

... I must be their *scourge* and *minister* [My italics]

という。彼は、あるいは、この二つの言葉を特に区別しないで、殆ど同じ意味で使ったのかも知れない。事実、この二つの言葉は、同じような意味でも使われた。しかし、当時行われていた両者の区別を考慮するとき、ここにも、ハムレットの復讐の複雑な一面が窺えるように思われる。

神の復讐は、先にみた通り、無生物や自然現象を通してだけでなく、人間を通しても行われるとされていたが、ただ、その場合、（君主や裁判官は別として）神はその手段（instrument）として、すでに救い難いまでに深い罪を犯している者をお選びになると信じられていたようである。[44] それは、たとえば、神の復讐が、殺人を必要とする場合、神が罪もない者にそのような真似をさせ、人殺しの罪を犯させなさったということになると都合が悪かったからでもある。それで、神は罪人（つみびと）を復讐の手段としてお使いになる。このようにして選ばれたのが神の「笞」（scourge）というわけで、彼は神の復讐の悪い面を一手に引き受け、その罰として死を与えられるのであるが、これに対して、神の代行者（minister）は、神の復讐の善い面、少なくとも悪くない部分を代行して、生き残るということになっていた。一応、このような区別があったのである。

たとえば、当時における神の「笞（スカージ）」として特に有名なものに、リチャド三世がある。彼は、ヘンリ四世の王位簒奪に端を発し、バラ戦争へと開花していった英国の悪を罰するため、神がつかわされた'retributive minister'つまり応報の笞なのである。かくして彼は、痛快なまでの暴君ぶりを発揮して貴族を苦しめ、大いなる神の笞たることを証明するのであるが、しかし神の怒りは、もう十分に罰したと思われるときに終る。リチャドも、いつまでも暴君でいるわけにはゆかない。そこでリッチモンドが神の代行者（ミニスタ）として、ローリ（Sir Walter Ralegh）のいわゆる'the immediate instrument of God's justice'として登場し、リチャド三世を（暗殺ではなく）ボズワースの戦場で堂々と討ち果すことによって公的復讐（パブリック・リヴェンジ）を遂げ、[45] 神の怒りもここで納まり、新らしい平和と繁栄がおとずれて、チューダ王朝になる、というわけである。

さて、'scourge'は、神の怒りの代行者で、悪人ないし罪人（つみびと）がこれに選ばれる。'minister'は神の正義の代行者で、善人がこれを行う。とすれば、自分を、意識していたにしろ、していなかったにしろ、'scourge *and*

minister'と呼んだハムレットは、一体何者なのであろう？　一点非の打ちどころのない善良なる人だったのであろうか？　それとも彼はすでに救いがたいまでに悪に染まっていたのであろうか？　又このような人が行なう復讐は、どのような性質のものになるであろうか？

マクベスに三人の魔女が誘いの声をかけたのも、実はマクベスその人の中に、すでに悪の萌芽がめばえていたからだということは、つとに指摘されているところである。同様に、亡霊がハムレットに復讐を命じるとき、すでにハムレットの心には、神の笞（スカージ）に選ばれるだけの素質が、このポロウニアス殺しの罪に彼を導く悪の芽が、亡父に対する極端なまでに理想化された憧憬と、その反動としての叔父に対する、これまた極端なまでの憎悪の中に、息づいていたとみることもできるであろう。これがハムレットを激情（パッション）に駆り立てるのである。ポロウニアスを殺すという過ちを犯させるのである。そして、この過ちを犯すことによって、逆説的に、ハムレットは、神の'scourge and minister'としての自覚に到達するのである。

かくしてハムレットは、神の怒りの笞（スカージ）として（ゴダードのいわゆる「悪魔的なハムレット」として）、デンマークの悪に、最後的にはその原因であるクローディアスに（これは'minister'として）、それまでは、簒奪のことは知らないまでも、ガートルードとクローディアスの結婚を許した、悪に染まった宮廷人に、次々に天罰を加えるのである。先ずポロウニアス、ついでロウゼンクランツとギルデンスターンといったふうに。これが、神の代行者（ミニスタ）でもある王子ハムレットの宿命なのである。そしてこの自覚が、最後にはハムレットを神の御手にゆだねることになるのである。

ハムレットは神の代行者（ミニスタ）として「公的復讐（パブリック・ヴェンジ）」の大任がある。それまでは、神の怒りの「笞（スカージ）」としての務めがあるのだ。そして、この分は、「代行者（ミニスタ）」としての大任を果した後で、償わねばならないのである。

I will bestow him, and will answer well
The death I gave him. (III. iv. 176-7)

ハムレットが、クローディアスの奸計をことごとくはずしながらも、ポロウニアスの一子レアーティーズの手にかかって死ぬのは、ゴタードが仄めかすように、決してクローディアスを殺したから、神の御手に属すべき復讐を自分の手で行うという僭越を敢て犯したから、つまりそうすることによって天罰を受けたからではないのである。クローディアスの死は、レアーティーズも云うように——

He is justly served. (V. ii. 338)

——当然の報いなのだ。そしてハムレットの死が、天から与えられた罰（punishment）ではなく、己が罪を贖っての死（expiatory death）であることは、次のレアーティーズとの形式的（フォーマル）な言葉のやりとりからも明らかであろう。

Laertes. Exchange forgiveness with me, noble Hamlet:
Mine and my father's death come not upon thee,
Nor thine on me! [*he dies*
Hamlet. Heaven make thee free of it! I follow thee... (V. ii. 340-43)

★

かくしてハムレットは、遂に、復讐を遂げる。先にもみたように、神の代行者（ミニスタ）としての公的復讐（パブリック・リヴェンジ）を。そして死ぬ。今みたように、贖罪の死（expiatory death）を。天に代って正義を行ったハムレットが、魂の気高さを失

った、悪魔的なハムレットでないことも、また贖罪としての彼の死が決して呪われた死でないことも、明らかであろう。このことは、達成されたハムレットの復讐が、どのように表現されているかをみるとき、いっそう明らかになるであろう。[46]

ハムレットが復讐を遂げるとき、たしかに、殺人の罪を犯す（'Thou shalt not kill!'）。しかし、殺人と一口に云っても、'murder' と 'manslaughter' の区別はあったのである。前者は謀殺（death by premeditation）であり、これは大きな罪であるのに対して、後者はまだ罪の軽い過失致死（death in hot blood）である。もしエリザベス朝の舞台において、復讐の機をうかがう復讐者が、たとえば「苦節何十年」と言明するならば、それは当時の観衆にとって、この人物が悪者（ヴィラン）であることを示すに十分なものであったろう。宗教的にも法的にも禁じられていた個人的な復讐に、なおも同情的であった当時[47]のイギリスの観衆にとっても、横っ面を打擲された復讐に、三十年も雌伏するイタリヤの悪漢（Italian villain）[48]は、（魅惑的な）恐怖の的であった。激しやすく、直情径行のイギリス人は、悪がなされたとき、その場で直ちになされる復讐[49]をこそよしとしたのである。[50] ハムレットは、「苦節何カ月」と言明はしないけれども、かねてクローディアスに復讐せんものと狙っていたのであるから、復讐が実現すれば、それは当然、罪の重い「謀殺（マーダ）」になる筈である。しかし、実際はどうであろうか？　ハムレットとしては、レアーティーズに詫びを入れ、仲直りのつもりで臨んだ試合である。それが相手方の奸計ゆえに、命とりの果し合いになったのだ。「謀った」のはクローディアス一味であって、ハムレットではない。ハムレットは、自分の好意を裏切られたのである。彼は激しい怒りにかられて、レアーティーズを傷つけ、クローディアスを刺し殺す。　しかしてこのときハムレットの与えた死は、'murder' ではなく、'manslaughter' ―― 文字通りの 'death in hot blood' なのである。そしてこの時のハムレットの怒りは、正義の怒りと云ってもよいであろう。

The *treacherous* instrument is in thy hand,
Unbated and envenomed....
... thy mother's poisoned ...
... the king, the king's to blame. (V. ii. 327 ff.) [My italics]

というレアーティーズの告白を聞かされて、ハムレットは、彼らの余りにも深い、陰険な企みに、

The point envenom'd too ! — (*Ibid.*, l. 332)

と云ったきり、しばらく口もきけない。しかし、気をとりなおせば、これこそ天の導びき（'heaven ordinant'— V. ii. 48）か、クローディアスを刺せと云わんばかりの毒剣（'the treacherous instrument'）が、ハムレットの手に握られているではないか？

Then, venom, to thy work. (*Ibid.*, l. 333) [My italics]

この'Then'という一言が、達成されたハムレットの復讐の性格を明らかにして余りあると思われる。

このようにみるならば、シェイクスピアがどのように心を配ってハムレットの'hero'としての気高さを保とうとしているか、少しは明らかになるであろう。大体、復讐劇のアクションは、主人公である復讐者が、いろいろと謀を回らして、苦難の末、遂に仇を倒すところにあるのだが、従って大抵の復讐者は復讐の本懐を遂げた時には悪漢に、Machiavellian villain になっており、ここに善人（'hero-revenger'）を主人公とする復讐悲劇のむずかしさがあるのだが、『ハムレット』の場合、奸計を企むのはクローディアスとレアーティーズである。『ハムレット』の悲劇は、まさに、クローディアスの毒薬によって始まり、毒薬によって終ると云ってよい。その毒薬が暗示するように、Machiavellian villain[59] であるクローディアスの手に企みをゆだねることにより、シェイクスピ

アは、主人公の魂の気高さを救ったのである。そればかりではない。ハムレットの気高さを保とうとする、否、高めようとさえするシェイクスピアの配慮は、ハムレットがデンマークを去った後、これこそ私的な復讐慾（そしてそのため身を滅ぼす）にとりつかれて登場するレアーティーズ（むしろ彼に我々は復讐者（'villain-revenger'）の典型をみる）を通して、対照的に——

To hell, allegiance! vows, to the blackest devil!
Conscience and grace, to the profoundest pit!
I dare damnation. To this point I stand,
That both the worlds I give to negligence,
Let come what comes; only I'll be revenged
Most throughly for my father. (IV. v. 131-6)

——、またハムレットの人のよさを悪用しようとするクローディアスの卑劣さ——

... he, being remiss,
Most generous and free from all contriving, ... (IV. vii. 135-6)

——を通して、逆に、強調されるハムレットの性格の気高さへの言及にも、みられるであろう。また、終幕における神の摂理への言及は、ハムレットの死が、彼自身の落度というよりは寧ろ神の御心であることを暗示し、さらに彼の死の直接の原因が、人を疑うことを知らぬ[8]ハムレットの性格の気高さにあったとも云えるのであるから、性格が運命だとするならば、ハムレットの死は、まさに運命的な、不可避的なものと云うべく、逆に云えば、ハムレットはその死において己が魂の気高さを全うするのだと云えるであろう。（もし彼がレアーティーズの奸

計をもはずしていたら、どうであったろうか？　そこには狡猾な復讐者の姿はあっても、高貴な王子の姿はなかったであろう。彼の死の中にこそハムレットの気高い魂の勝利があったのだ。崇高な悲劇感を呼ぶ所以である。）ハムレットの死は、また先にみたように、魂に罪の重荷を負うての死ではない。かくして、王子としての大任を果し、罪障が全く消滅したハムレットの魂は、ホレイショウの美しい別れの言葉に送られて、天国へと旅立つのである――

Now cracks a noble heart. Good night, sweet prince;
And flights of angels sing thee to thy rest!　　(V. ii. 370-71)

一昨年来日したテアトル・ド・フランス（マドレーヌ・ルノー＝ジャン-ルイ・バロー）が上演した『ハムレット』の幕切れは、この二行を舞台上に視覚化して、きわめて印象的であった。『ハムレット』の銷された、悲劇的な世界を象徴するかのように、重くたれこめた背景の黒い幕が、フォーティンブラスの到着が告げられるや、さっと左右に開かれ、明かるい空の青みから白銀の衣裳を身にまとったフォーティンブラスが、あたかも天使の舞い降りるように、階段を降りてくる。陰惨な破局の場面が、中央から二つに割れて、明かるい空の青さを見たとき、まさに天国を見る思いであった。その天国へ、ハムレットは、これまた純白のガウンをまとった四人の隊長に担がれて、その階段をゆるやかに昇って行くのである。あたかも純白の天使の翼につつまれて、天国へ昇るかのように。

三

さて、ハムレットの復讐と彼の死に、このような表現を与えたシェイクスピアは、それでは、ハムレットの復讐を、彼の悲劇を、どのようにみていたであろうか？　そしてそれにどのような劇的価値を見出し、それを通し

て何を表現しようとしたのであろうか？　勿論、断言は許されない。我々は、ただ、シェイクスピアが与えた劇的表現を通して、我々に許される限りの接近（アプロウチ）を試みることで満足すべきであろう。

如何なる理由にもせよ、人を殺したものは、やがてはその報いを受ける。復讐を神にまかせ、自らはじっと耐え忍んだものには、神の恩恵がある。たしかに、これは、一つのモラルである。劇の偉大な筋書き（fable）である。メイスフィールドも云うように、[33] 偉大な筋書きなくして偉大な芸術はない。すべての人が少し考えることを、偉大な人が強烈に考えるところに、偉大な芸術は存在するのである。一般民衆に受け入れられた、あるいは誰もが受け入れるような筋書なしには、作者の独善を離れた、公平無私の芸術は存在しないであろう。いわゆる因果応報というのは、誰もが認める筋書きであり、この劇の偉大な筋書きでもある。問題は、これが、シェイクスピアの強烈な想像力にあって、どのような‘sea-change’を受け、どのように「豊かで奇しきもの」になったかということであろう。

ハムレットは、ゴダードの云うように、『無神論者の悲劇』の主人公のように復讐をあきらめ（‘Patience is the honest man's revenge’ — the concluding line of *The Atheist's Tragedy; or the Honest Man's Revenge*）、神の御心のまま、天寿を全うすべきであったろうか？　そこには、たしかに、宗教的な、シェイクスピアの天才を借りれば気高かくさえあり得るハムレットの姿がみられたかも知れない。しかし、そこには、シェイクスピアの『ハムレット』にみられる崇高な悲劇性は、もはやみられないであろう。ハムレットは、また、王子として、正義の復讐者として、神の代行者（ミニスタ）として、何のためらいも迷いもなく、堂々とクローディアスを討ち果すべきであったろうか？　そこには、たしかに、古代の英雄の姿がみられたことであろう。しかし、そこには、勇壮さはあっても、苦悩する気高い王子の魂の美しさは失われてしまったことであろう。

シェイクスピアは、ハムレットの復讐に、公的な性質を認めなかったのではない。否、認めたればこそ、ハムレットは復讐し、その結果デンマークの秩序は回復するのである。しかしながら、当時の公的復讐（パブリック・リヴェンジ）の思想を楯に、ハムットの復讐を正当化し、弁護することは、ベルフォレならぬシェイクスピアの、劇作家としてのモラル・センスが許さなかったであろう。彼はハムレットに致命的な過ち（ポロウニアス誤殺）を犯させることによって、公的復讐（パブリック・リヴェンジ）のモラル（復讐の正当化）を厳しく拒絶する。と同時に、かくして達成された『ハムレット』の崇高な悲劇性を確保したのである。

ハムレットは、王子として、「関節のはずれた」世を正さねばならぬ。しかし、それは、あくまで「呪われた宿命」であったのだ。ハムレットは、そういう。シェイクスピアは、黙して語らぬ。しかし、彼がハムレットの復讐に与えたアクションからして――ハムレットの死を予定することにより、彼に神の代行者としての自覚と資格を与えた（とみえる）シェイクスピアの態度からして――、私には、ハムレットの復讐に対するシェイクスピア自身の考えも、そうであったろうと思えてならないのである。

「正義」（'justice'）などというものは、たしかに神の意志かも知れないが、人の情として、如何にも厭わしい（'the rarer action is / In virtue than in vengeance' — *Tempest*, V. i. 27-8）。それは悪魔の意志のごとく無情であり、事実、神の正義を行うために、悪魔（たとえば、リチャド三世。またゴダードの云う「悪魔的なハムレット」。つまり「笞（スカージ）」）が呼び入れられたりする。「正義」とは、ロシタの言葉を借りるなら、まさに「（悪魔の）角を生やした天使」[3]なのだ。当時の道徳上の主義や因襲にとらわれることなく、人間性や事物の本質に鋭く注がれる詩人の曇りなき心の眼は、ベルフォレらが讃美する「公的復讐（パブリック・リヴェンジ）」の美名のヴェイルの背後に、復讐（＝正義）そのものの呪われた本質を誤りなくとらえていたと思われる。そしてそれをそのまま、如何なる注釈をも加えることな

く、詩劇の鏡にうつしとったのが『デンマークの王子ハムレットの悲劇』ではなかったか。

復讐行為は、本質的に、呪われた、悲劇的なものであったのだ。しかしながら、だからと云って、その行為を行ったハムレットその人も、その結果、呪われた死を遂げ、魂の気高さを失ったとするのは、余りにも皮相な、公式的な見方であろう。ハムレットの犯すポロウニアス誤殺は、また、結果的に、このような見解を拒絶する。ハムレットの死は、先にもみたように、決して呪われた死ではなく、この彼の罪を贖っての死であったのだ。しかしながら、このような罪を犯すことによって、神の代行者（ミニスタ）であると同時に笞（スカージ）にならねばならなかったハムレットの宿命は、たしかに、呪われたものであったと云わねばなるまい。シェイクスピアの鋭い洞察力は、しかしながら、この「呪われた宿命」を誤りなくとらえて、それに見事な劇的表現を与えると同時に、その「呪われた宿命」の中にあってしかも失われぬハムレットの魂の気高さ、人間性の悲劇的な崇高さを、しっかりとらえてはいなかったであろうか？　そしてこの、ゴダードが最後には失われるとするハムレットの魂の気高さこそ、シェクスピアが『ハムレット』において最後に見出した「最も根本的な現実」――如何なる外的な影響をも受けぬ真の価値――ではなかったであろうか？

悲劇の世界にあって、その主人公は、完全なる公的復讐者（パブリック・リヴェンジャ）ではあり得ない。理論による正当化は許されないのである。悲劇の、否、一般的に芸術作品の、モラルは、その時代の社会的、宗教的規範に合うか否かにあるのではない。それは、ただ、芸術を安易に堕さしむ以外の何物でもないであろう。芸術の本来のモラルは、真実を求める芸術家の、苦悩に満ちた良心の真摯な努力の中にある。そして既成のモラルを越えるところにあるのだ。

復讐の大任を負わされたハムレットの、苦悩に満ちた摸索の過程は、まさにこの努力の悲劇的な表現である。復讐の問題は、ハムレットにとって、教義上の問題ではない。時の社会的、道徳的規範に合うか合わぬか、それ

が正しいか否かの問題ではないのである。それは、（思索的傾向の強い）ハムレットにあっては、そのまま彼の生き方の問題に結びつき、人生如何に生きるべきかの問題は、（王子として）彼のおかれた状況にあっては、必然的に復讐（＝正義）を行うべきか否かの問題につながる。これこそシェイクスピアがハムレットの復讐に見出した劇的な価値ではなかったか？　ハムレットは復讐の大任を負わされることにより、事の真相を知らされるのであり、これがハムレットをして人生の「見かけ」のヴェイルを切り裂き、その裏にある現実を探究せしめるのである。『ハムレット』のアクションは、従って、単なる復讐劇のアクションではない。復讐を追求するハムレットのアクションは、そのまま、彼のおかれた状況にあって、魂の気高さを失うことなく生きる道を摸索するハムレットのアクションであり、この両面のアクションが悲劇『ハムレット』の構成を支えて、これを「奇しく豊かなもの」にするのである。

腐敗したデンマークにあって、道徳上の主義、因襲がことごとく厭わしい、陳腐、平板、無益なものとみえる世界にあって、ハムレットは、既成の道徳原理に従って生きることは許されない。勿論、先にみたように、無批判に公的復讐（パブリック・リヴェンジ）のモラルによって行動することも、またクロウナの指摘するように、[34] 中世の王子のように僧院に入ることによってこの問題を忌避することも、許されていない。このようにしてシェイクスピアによって作り出された「複合状況」(complex situation)[37] にあって、ハムレットは、迷いながらも、己れの「理性」と「良心」に従って、己れの全責任において、全人格を通して、行動する。ここに、アリストテレスが云った意味での戯曲における真の「性格」が、――行動の道徳的選択から生じる「性格」[38] が――立ち現われるのである。ハムレットのおかれた状況にあって（その意味では如何なる社会においても）、理性に従い、良心に従って生きようとすればするほど、如何に生きるべきかの問題はますます複雑な様相を呈してくる。『ハムレット』の悲劇感は、まさにこの錯

綜した状況にあって、心正しき道を見出そうとする若き王子の苦悩に満ちた努力から生ずる。そしてそれを崇高ならしめたのは、劇のアクションを、当時のモラリティの問題から一個の高貴な魂の問題に移したシェイクスピアの「詩(ポウエトリ)」であり、それが可能ならしめた劇的表現なのである。

註① デンマークの王位は、フォーティンブラスによってしか継がれるほかなかったのであろうか？ 彼をジェイムズ一世に擬するフランク・オウコナは、フォーティンブラスの部分(彼のいわゆる 'the whole mysterious Fortinbras business') を、老女王の死と継承の問題に関連した加筆とみている (Frank O' Conner, *Shakespeare's Progress*, The World Publishing Company, 1960, pp. 122-4)。とすれば、デンマークの習慣に無知なホレイショウ (*Cf.* I. ii. 175, iv. 12)が、見張りの兵士の知らないデンマークの内情に通じていることの矛盾 (?) も、あるいは、説明されるかも知れない。

② Therefore our sometime sister, now our queen,
The imperial jointress to this warlike state,
Have we, as 'twere with *a defeated joy*, —
With *an auspicious* and *a dropping* eye,
With *mirth in funeral* and with *dirge in marriage*,
In equal scale weighing *delight* and *dole*, —
Taken to wife:... (I. ii. 9-14) [My italics]

という技巧的(アーティフィシャル)なクローディアスの偽善の言葉で始まった『ハムレット』の悲劇が、このフォーティンブラスの卒直な(余りにも卒直な) 言葉で終るのをみるとき(*Cf.* also Hamlet, dead, borne by four captains, 'like a soldier' (V. ii. 407), as becomes the prince of 'this warlike state' (I.ii. 9) of Denmark)、我々は、因果の環が一めぐりして、本来の (しかし新らしい) 秩序に立ち返った世 ('time') の姿をみる思いがする。*Cf.* 'Madam, all sorrows / Must run their circles into joys' (*The Revenger's Tragedy*, V. i.), [though, here, not the joys of Hamlet, but those of Fortinbras who represents a new world-order].

なお、シェイクスピアからの引用は、すべて、グロウブ版による。

③ Harold C. Goddard, *The Meaning of Shakespeare*, The University of Chicago Press, 1951, p. 381.

④ Harry Levin, *The Question of 'Hamlet'*, Oxford University Press, New York, 1959, p. 100.

⑤ クローディアスがその初登場（一幕二場）において敗わねばならなかった三人の若者の間にみられるパラレルも、つとに指摘されているところである（*Cf.* Fergusson, *op. cit.* pp. 106, 139-40; more recently, *cf.* Harold Jenkins, 'The Tragedy of Revenge in Shakespeare and Webster', *Shakespeare Survey 14*, ed. Allardyce Nicoll, Cambridge University Press, 1961, pp. 45-6, 48)。いずれも父親を殺されて復讐を誓うのだが、正当な復讐の理由を持たぬフォーティンブラス（彼の父の死は、正式の一騎打ち ['by a seal'd compact, / Well ratified by law and heraldry' — I. i.86-7] に敗れた結果であった）、正当な復讐者であると同時に、そのため被復讐者にもなるハムレット、そして当時の 'code of revenge' にかられて身を滅ぼす、典型的な 'villain-revenger' のレアーティーズが、それぞれの性格（＝行動）の対照を通して、それぞれの復讐の性質を浮き彫りにするのである。For the code of revenge, *v.* Fredson Bowers (*Elizabethan Revenge Tragedy, 1587-1642*, Peter Smith, 1959 [1940], p. 38), who quotes Cotton MS., Titus C IV, fol. 294: "It is dishonor to reuenge the fathers wronge if he be able to reueng it personally [;] if he be not [,] the son is bounde to it" and *ibid.*, fol. 241: "the ciuile law denies the fathers inheritance to that son which will not reuenge the death of his father."

⑥ Levin, *op. cit.*, p. 24.

⑦ Goddard, *op. cit.*, p. 341.

⑧ *Cf.* Belleforest's *The Hystorie of Hamblet* (quoted H. H. Furness, *A New Variorum Edition of Shakespeare*, Vol. IV, *Hamlet*, Part 2, Philadelphia, 1877, p. 108) : 'beeing comforted thereby [*i. e.*, by hearing him revenged by his own son], his soule may rest among the blessed spirit.' *Cf.* also *Macbeth*, V. vii. 14-6: 'Tyrant, show thy face! / If thou be'st slain and with no stroke of mine, / My wife and children's ghosts will haunt me still'; *Julius Caesar*, V. v. 50: 'Caesar, now be still: …' and G. L. Kittredge's comment there; also *Titus Andronicus*, I. i. 100 -101; etc.

⑨ J. Q. Adams (ed.), *Hamlet*, Camb. Mass., 1929, p. 211.

⑩ ハムレットは亡霊の命令を、何のためらいもなく、いささかの疑いもさしはさまず、むしろ熱心に受け入れる——

Haste me to know't, that I, with wings as swift

As meditation or the thoughts of love,
May sweep to my revenge. (I. v. 29-31)

しかしゴダードは、その「何の疑いもなく、むしろ熱心に」受け入れるというのが、却って疑わしい、あやしい、と云うのである（*Op. cit.*, p. 336）。それはハムレットの、父を余りにも理想化する傾向に向けられたゴダードの疑惑の目に通じるものがある。何故ハムレットはあのように激しく、異常なまでに父を理想化するのであろうか？　それはハムレットが内心、父を愛していたと同時に厭うていたからではなかったか？　その気持を抑えるために、あのように激しく理想化するのではないか？　亡霊の命を受け入れるときのハムレットの気持も同断だとゴダードは云うのである。復讐を厭うていたが故に、（それを抑し隠すために）このように熱心に受け入れるのだと。その証拠に、ここに使われているメタファを見るがよい。「翼、思い、恋。血なまぐさい行為に、何と不適当な装備であろう！　シェイクスピアにあっては、実にしばしばそうなのだが、メタファがロジックを打ち消して、ロジックの頭越しに真実を語る」（*Ibid.*, p. 349）のだと。メタファに関する限り問題はない。問題は、（亡霊の面前ではともかく）何故ハムレットが復讐を厭う気持を押し隠さねばならなかったかということである。ゴダードは、それに対して、新らしいモラリティは、特に道徳的な規範が確固として存在している時代には、無意識の中にしか生じない（*Ibid.*, p. 345）ものだと云うのだが、しかし復讐の否定は、後にみる通り、決して「新らしいモラリティ」ではなかった。だから、ハムレットが、たとえ王子の義務として、どうしても「関節のはずれた」世の中を正さねばならなかったとしても、そしてそれが叔父を殺すことによってでなければならなかったとしても、例えばシャルルモンとは逆の意味で、

You torture me between the passion of
My blood and the religion of my soul. (*The Atheist's Tragedy*, III. ii.)

と云っても許されたであろう。

⑪ 復讐否定の思想が、他の復讐劇にはっきりした形であらわれていると云ったが、それはあくまで宗教上の教義の問題としてであって、『ハムレット』においては、もしそれがみられるとするならば、アダムズをして近代的な「倫理」と云わしめた種類のものに変容されている点に注意すべきであろう。

⑫ Lily B. Campbell, 'Theories of Revenge in Renaissance England', *Modern Philology*, XXVIII, 1930-1931, p. 282.

⑬ Frederick S. Boas (ed.), *The Works of Thomas Kyd*, Oxford, 1955, p. 293. キッドの作品からの引用は、すべてこの版による。

これと同じ思想が『ハムレット』にもみられることは、次の引用が示す通りであるが、その表現の違いの大きさに気づかれるであろう。ここでは「神」には一言もふれられてはいない。

... foul deeds will rise,
Though all the earth o'erwhelm them, to men's eyes. (I. ii. 257-8)

これはホレイショウらから亡霊の出現を知らされた時のハムレットの感慨であり、

For murder, though it have no tongue, will speak
With most miraculous organ. (II. ii. 622-3)

は、芝居が犯罪者に与える影響との関連において語られたものである。

後にふれる「公的復讐（パブリック・リヴェンジ）」や「神の復讐」の思想も、『ハムレット』に含まれていないのではない。問題は、それらに与えられた表現である（「良心の呵責」も神の復讐の一と考えられてはいたが、'leave her to heaven' と並べておかれるとき、多分に人間的な色彩を帯びて、亡霊の言葉の宗教性をモディファイするのである。下記一五—一六頁参照）——

But, howsoever thou pursuest this act,
Taint not thy mind, nor let thy soul contrive
Against thy mother aught: leave her to heaven
And to those thorns that in her bosom lodge,
To prick and sting her. (I. v. 84-8) [My italics]

⑭ *V.* Bowers, *op. cit.*, pp. 13-4.

⑮ *V. ibid.*, p. 40, for several sorts of death of revengers.

⑯ Frederick S. Boas (ed.), '*Bussy D' Ambois' and 'The Revenge of Bussy D' Ambois*', by George Chapman: "The Belle-Lettres Series," D. H. Heath & Co., Publishers, 1905.

⑰ *Cf.* the concluding lines of *The Maid's Tragedy*:

May this a fair example be to me,

To rule with temper; for on lustful kings
Unlooked-for sudden deaths from Heaven are sent;
But cursed is he that is their instrument.

⑱ *V.* Bowers, *op. cit.*, pp. 170–76 and 281.

⑲ シェイクスピアにおける神の復讐に対する言及は、先に挙げた『ヘンリ五世』のほか、『タイタス・アンドロニカス』（四幕一場一二九―三〇行）、『リチャード三世』（一幕四場一〇〇―一〇五、一三一―五行）など初期の劇に多く、また『ペリクリーズ』（二幕四場一―一〇、一三―六行、三幕三場一三―五行、五幕三場九五―一〇〇行）、『冬の夜話』（三幕二場一四七―八行）、『シンベリーン』（五幕一場七―一四行、同五場四六三―五行）と云った後期の作品にもみられるが、少なくとも四大悲劇においては影をひそめていることは、興味深い事実と云わねばならない。キッド（『スペインの悲劇』）の影響を多分に受けている『タイタス』、また乱脈をきわめた王国にあって希求される秩序の背後に絶えず神の秩序の存在を感じさせる歴史劇に、このような言及がみられるのは、あるいは当然かも知れないし、又アンタイアカスの最期を語る次のくだりは、たしかに、伝奇劇の世界にふさわしい――

Helicanus. Antiochus from incest lived not free:
For which the most high gods not minding longer
To withhold the vengeance that they had in store,
Due to this heinous capital offence,
Even in the height and pride of all his glory,
When he was seated in a chariot
Of an inestimable value, and his daughter with him,
A fire from heaven came and shrivell'd up
Their bodies, even to loathing; ...

Escanes. 'Twas very strange.

Helicanus. And yet but justice; for though
This king were great, his greatness was no guard

To bar heaven's shaft, but sin had his reward.

Escanes. 'Tis very true. (*Pericles*, II. iv. 2-16)

しかし、悲劇の世界にあっては、このようなことは起り得ない。起ってはいけないのである。この意味で *The Atheist's Tragedy, or the Honest Man's Revenge* の世界は、その結末のつけ方から云っても、悲劇の世界とはほど遠いものと云わねばなるまい。

⑳ *Cf. Hamlet*, II. ii. 580-81:

... I am pigeon-livered, and lack gall

To make oppression bitter, ...

㉑ 下記二六一七頁参照。暴君も一種の天災のようなもので、善良な人民こそいい迷惑だが、これも神の御心と、耐えねばならないのである。リチャード（後の三世）の暴虐に苦しむ市民も、

All may be well; but, if God sort it so,

'Tis more than we deserve, or I expect.

(*Richard III*, II. iii. 36-7)

と云って不満を抑えるほかない。

㉒ *Cf. A Dissuasive from Revenge*, pp. 61-2 (quoted Campbell, *op. cit.*, p.290) : 'So proper is vengeance to God, that it belongs to none besides him, except only those, to whom he hath given special license to execute it; that is, to publicke Magistrates, and Superiors in Authority, who by virtue of their Office, are also Avengers; but what is inflicted by them, is to be accounted no other than the Vengeance of God, because they as God's Ministers are commissioned by him.'

㉓ *Cf.* J. A. Bryant, Jr., *Hippolyta's View*, University of Kentucky Press, 1961, p. 125: '... even the principle of talion was, at least originally, to be applied by the judge as an agent of divine authority, not by the ordinary individual.'

㉔ *Cf. The French Academie*, [1586] 1594 ed., p. 326(quoted Campbell, *op. cit.*, p. 287):'For hee hath ordained the meanes, whereby hee will have vengeance executed among men. Therefore hee hath appointed Magis-

trates to execute it according to his Lawe, and following his ordinaunce, not with any evill affection, but with just indignation proceeding from love and from true zeale of justice ...'

(88) *Felicitie of Man*, p. 520 (quoted Campbell, *op. cit.*, p. 289).

(89) *Cf.* 'He who takes vengeance on the wicked in keeping with his rank and position does not usurp what belongs to God, but makes use of the power granted him by God. For it is written (Rom. XIII. 4) of the earthly prince that *he is God's minister, an avenger to execute wrath upon him that doeth evil.* If, however, a man takes vengeance outside the order of divine appointment, he usurps what is God's and therefore sins' (St. Thomas Aquinas, *Summa Theologica*, quoted Bryant, *op. cit.*, p. 125). *Cf.* also 'Sometimes a wrong done to a person reflects on God and the Church: and then it is the duty of that person to avenge the wrong... But in so far as the wrong inflicted on a man affects his person, he should bear it patiently if this be expedient' (*Ibid.*).

(90) Furness, *op. cit.*, p. 113. *Cf.* also p. 112, *ibid.*, 'Hamlet, the minister and executor of just vengeance.' Compare the long oration made by Belleforest's Hamblet to the Danes by way of self-justification (pp. 109-113, *ibid.*) with the misgivings of Shakespeare's Hamlet (who has no chance to satisfy his people as Belleforest's had) shown in his asking Horatio to live and

> ... report me and my cause aright
> To the unsatisfied. (V. ii. 350-51)

(91) Furness, *op. cit.*, p. 108: 'Not that this holy king [*i. e.* David] (as then ready to dye, and to give account before God of all his actions) was carefull or desirous of revenge, but to leaue this example unto us, that where the prince or countrey is interessed, the desire of revenge cannot by any meanes (how small soever) beare the title of condemnation, but is rather commendable and worthy of praise:...'

(92) *Cf.* Campbell, *op. cit.*, p. 293.

(93) L. C. Knights, *An Approach to 'Hamlet'*, Chatto & Windus, 1960, p. 78.

(94) Robert Ornstein, *The Moral Vision of Jacobean Tragedy*, The University of Wisconsin Press, 1960, pp.

222-3.

㉜ *Ibid.*, p. 224.

㉝ 実際、カイラテンスーがからやって来たホレイショーと旅廻りの役者たち、それにフォーティンブラスを除けば、舞台に登場する人物はこぞりこぞって（クレイジャーもある意味では）、クローディアスの悪の影響下におかれるのである。

㉞ この心とくレイジャーの佯狂とは、決して無関係ではない。 *Cf.* Mack, *op. cit.*, pp. 38-40; and also Polonius' comment on Hamlet's replies: 'How pregnant sometimes his replies are! a happiness that often madness hits on, which reason and sanity could not so prosperously be delivered of' (II. ii. 212-5). In this connection, *cf.* Ralph J. Hallman, *Psychology of Literature*, Philosophical Library, Inc., New York, 1961, pp. 139-43; Alvin Kernan, *The Cankered Muse*, Yale University Press, 1959, pp. 220-21; and John Holloway, *The Story of the Night*, Routledge & Kegan Paul, 1961, p.33. この点に関しては、いずれ機をみて、くわしく論じたいと思う。

㉟ *Cf. Antony and Cleopatra*, I. iii. 53-4 : '... quietness, grown sick of rest, would purge / By any desperate change : ...'

㊱ Hiram Haydn, *The Counter-Renaissance*, Charles Scribner's Sons, 1950, p. 633.

㊲ *Cf.* Ornstein, *op. cit.*, pp. 239-40.

㊳ *Cf. Othello*, V. ii. 6: 'Yet she must die, else she'll betray more men.'

㊴ この時のくレイジャーの言葉は、まさに、典型的な復讐劇の主人公のそれである。(Bowers, *op. cit.*, pp. 123-4 参照。)
Cf. The Revenger's Tragedy, III. v.:

> Brother, I do applaud thy constant vengeance,
> The quaintness of thy malice above thought.

On which G. B. Harrison comments: 'It was essential that an act of vengeance, to be thoroughly satisfying, should be some rare device. In the perfect revenge play, the victim dies in extreme agony of body and mind, and when engaged in actual sin so that damnation may follow death' (G. B. Harrison (ed.), *The Revenger's Tragedy* by Cyril Tourneur: "The Temple Dramatists", J. M. Dent & Sons Ltd., 1934, p. 130) ; '... and so they [Italians] seeke in slaying the bodie to damne the soule, if they could' (Bowers, *op. cit.*, p.52).

For Hamlet's mention of Claudius' soul to be 'damn'd and black', *cf. The Revenger's Tragedy*, III. iii.:

> ... for the gaping people
> Will but trouble him at his prayers,
> And make him curse and swear, and so die black.

and Harrison's note: 'Those who died blaspheming were expected to turn black as a sign of their damnation. Thus in the fearful story of vengeance in *Jack Wilton* (Nashe's *Works*, ed. McKerrow, ii. 326), when the victim was killed, "his body being dead, looked as black as a toad; the devil presently branded it for his own" ' (Harrison, *op. cit.*, p. 129).

㊵ For the implication of Hamlet's voyage to England, *v.* Mack, *op. cit.*, pp. 34–5.

㊶ 私的な感情を脱するということは、必ずしも全く無感動になるということではない。クローディアスを刺すとき、恐らくハムレットは激しい怒りにかられていたことであろう。しかしそれは、クローディアスの卑劣な裏切り行為に対する義憤（'just indignation' –*v.* n. 24 above）といったものであり、いわば「神の怒り」なのである。誰に対してなされたものであれ、このような卑劣な行為は許されてはならないのだ。この辺の事情は、愛妻をしめ殺す時のオセロウの心境を考え合わせる時、より明瞭になるであろう。彼を復讐にふみきらせた、かつての嫉妬や憎悪、デズデイモウナを呪う気持が、このとき、オセロウの心から全く消えうせていたかどうかは分らない。大事なのは、彼がデズデイモウナを殺すのは、決して、嫉妬とか憎悪とかいった私的な感情からではなく、正義のために殺すのだということである。（'It is the cause, it is the cause, my soul, —', *Othello*, V. ii. 1）少なくともオセロウの意識において、彼は正義（'Justice'— *ibid.*, l. 17）の代行者なのだ。デズデイモウナは（オセロウの目からは）己れの犯した罪のために死なねばならない（'else she'll betray more men.' — *ibid.*, l. 6）。そして自分が愛する者を殺さねばならないのだ。この悲しみ、そしてデズデイモウナを憐れむ気持が、この時の彼の心を領しているのだ——

> ... this sorrow's heavenly;
> It strikes where it doth love. (*Ibid.*, ll. 21–2)

だからデズデイモウナがハンカチのことで否定するとき、彼は激しい怒りにかられて叫ぶのである——

> O perjured woman! thou dost stone my heart,

And makest me call what I intend to do

A murder, which I thought a sacrifice: …　　(*Ibid.*, ll. 63-5)

実際どうであったかはともかく、今の場合、オセロウが自分の行為をどう解していたかということ――彼の意識が問題なのである。彼の意識においては、彼はあくまで

An honourable murderer, if you will;

For nought I did in hate, but all in honour.　　(*Ibid.*, ll. 294-5)

なのだ。ハムレットは決してこのような言明はしない。我々は、ただ、彼の言葉のはしばしから、うかがい知る(と思う)ことができるのみである。

㊷ *Cf.* G. R. Elliott, *Scourge and Minister*, Duke University Press, 1951, pp. xxiv-v.

㊸ For the closet scene as 'a recognition scene', *v.* Bryant, *op. cit.*, pp. 130-33. *Cf.* also Fredson Bowers, 'Hamlet as Minister and Scourge,' *PMLA.*, LXX (1955).

㊹ For this, and for that matter, the whole of this part, *v.* Fredson Bowers, 'Hamlet as Minister and Scourge.'

㊺ *Cf. Richard III*, I. iv. 221-2:

If God will be revenged for this deed,

O, know you yet, he doth it publicly:...

なお、「神の復讐」が、ハンリ五世にではなく、ハンリ六世にまで延期(?)されたことについては、M. M. Reese, *The Cease of Majesty*, Edward Arnold (Publishers) Ltd., 1961, n. p. 16 参照。

㊻ *V.* Fredson Bowers, 'The Death of Hamlet: A Study in Plot and Character' (*Studies in the English Renaissance Drama*, ed. Josephine W. Bennett, Oscar Cargill and Vernon Hall, Jr., Peter Owen & Vision Press, 1959, pp. 28-42). *Cf.* also Bowers, *Elizabethan Revenge Tragedy*, pp. 8-12.

㊼ *V.* Fredson Bowers, *Elizabethan Revenge Tragedy*, p. 37.

㊽ *Ibid.*, p. 51.

㊾ 達成されたハムレットの復讐は、まさにこれである。

㊿ Bowers, *ibid.*, pp. 16-7. *Cf.* also p. 30, *ibid.*

(51) For poison, *v.* pp. 26ff. and n. p. 53, *ibid.*; for hypocrisy and deceit, *v.* pp. 54 ff., *ibid.*

(52) ハムレットのこの性質が強調されるのも、彼がデンマークを去って後のことである点に注意。亡霊から真相を告げられて、すべてのものに疑いの目を向けるハムレットの（特に二幕二場におけるロゼンクランツとギルデンスターン、また「尼寺の場」（三幕一場）におけるオフィーリアに対して示した鋭敏な）行動を考え合せれば、シェイクスピアの意図がどの辺にあったか、想像に難くないであろう。

(53) John Masefield, *Shakespeare*, Williams & Norgate, London, n. d., p. 212. *Cf.* Arthur Miller, who tries 'to unveil a truth already known but not recognised' (quoted Adrian Brine, *Drama*, Summer 1961, p. 37).

(54) A. P. Rossiter, *Angel with Horns and Other Shakespeare Lectures* (ed. Graham Storey), Longmans, 1961, p. 20 ; *cf. Measure for Measure*, II. iv. 16.

(55) L. C. Knights, *Some Shakespearean Themes*, Chatto & Windus, 1959, p. 100. *Cf.* also pp. 114 ff., *ibid.*, and Goddard's 'the last word' (*op. cit.*, p. 335).

(56) リヒアルト・クローナー、阿部正雄訳「何故ハムレットは復讐をためらうのか」（『哲学研究』第四百六十六号。第四十巻、第八冊。一九頁）

(57) Kenneth Muir, 'Shakespeare and the Tragic Pattern,' Annual Shakespeare Lecture of the British Academy, 1958 (*The Proceedings of the British Academy*, XLIV, p. 154). *Cf.* also Kenneth Muir, *William Shakespeare: The Great Tragedies*, Longmans Green & Co., 1961, p. 16.

(58) 山本修二「三つの演劇用語について」（『英文学評論』第IV輯）参照。

〔付記。本稿は、もと、第三十二回日本英文学会（昭和三十五年五月二十九日）のシンポジアム（『ハムレット』）において発表したものに、多少の加筆を施したものである〕